

『ジョージア・ボーイ』試論

北嶋 藤郷

序章

1920年代のアメリカは、30年代の大恐慌や40年代の第二次世界大戦という危機的時代が次に控えていることを思いあわせると、華々しく賑やかな恍惚と頹廃の風潮がいつそう印象的である。めくるめくような時代が包蔵する危険な華やかさやその底辺に漂う幻滅感是人々を魅了してやまない。1920年といえば、フィッツジェラルドの処女長編の『楽園のこちら側』(*This Side of Paradise*)が発刊され、爆発的な売れ行きを記録した。楽園を求めてなおその中に入りえない若者たちの焦燥やそこに漂う人生の空しさを描いて、因襲の型にとらわれない青年男女の共感をかちえたのである。当時の舞踏会では、ダンスの伴奏音楽は従来のオーケストラからジャズバンドに変わり、サキソフオン奏者が前にでて、過去もなく、思い出もなく、未来もなく、希望もなく、限りなく悲しい、しかも限りなく非情な、耳をつんざくような音楽を響かせていた。英国のジャーナリスト、ウィリアム・ボリソーはこれを戦後の時代精神(Zeitgeist)と名づけた。

1930年代、アメリカの深南部ジョージア州から一人の地方的な特色をもった作家が誕生した。連合改革長老派教会の牧師の子として生まれ、さまざまな職業体験を経た後、故郷の農村地帯に材を求めた『タバコ・ロード』(*Tobacco Road*, 1932)によって若干20代で文壇デビューしたアースキン・コールドウェル(Erskine Caldwell, 1903-87)である。次作の『神の小さな土地』(*God's Little Acre*, 1933)も、前作と同様に、これまであまり注目されていなかった、南部辺境地帯におけるプア・ホワイト(貧窮白人)のグロテスクな生態に焦点をあわせ、観察の対象にして、これをきわめてリアルに描きだしたのであった。同郷のジャック・カー克蘭ドの脚色になる「タバコ・ロード」がニューヨークの劇場で33年から7年半(3182回)ものロングランを続け、演劇史上の記録を作ったことや、とくに後者が猥褻作品であるとして裁判沙汰⁽¹⁾をひき起こしたことなどと相まって、驚異的な販売成績を記録し、そのセンセーショナルな成功は、過去のアメリカの文学者たちが今までに望みえな

かったほどの名声と富をコールドウェルに与えた。

コールドウェルは、1930年代という社会意識の強烈であった時代に、芸術的想像力を社会的良心の問題において働かせながら、意欲的に作品を書き続けてきた作家である。中編「昇る朝日に跪け」(“Kneel to the Rising Sun,” 1935)を例にひけば、南部プランテーション制度のもとで、黒人以上におとしめられ、重労働を強いられ、伸吟するプア・ホワイトの主人公ロニーの揺れ動く心理や行動、生活の実態などを考えあわせると、プロレタリア文学やそれに類する社会抗議のラディカルな文学の範疇に組み入れて当然なものであった。この物語は、勇気ある黒人の使用人クレムが地主に帽子を脱がずに抗弁したために発生した黒人リンチ問題を扱っていて、しだいに盛り上がる劇的迫力は圧巻である。「クレムは社会正義の宗教を弟子のロニーに教えながら、田舎道を歩く黒人キリストである。しかしユダとペテロの所有者であるロニーは、夜明け前に黒人の主を裏切り、武装した男たちの手に渡してしまう……」⁽²⁾とキリストの受難のイメージと重ねて読みとる批評家もいる。

コールドウェル文学の特質のもうひとつは、豊かな物語性と喜劇的側面にあるといえよう。アメリカ文学ならではのトール・テイルの伝統を踏まえたアメリカン・ユーモアの一面は、コールドウェルの文学にも散見され、彼の親しげな語り口の面白さは無類で、彼独特の民話風の世界を構築しているといえる。本稿ではこの作家の第5冊目の連作長編『ジョージア・ボーイ』(*Georgia Boy*, 1943)をとりあげて論述してみたい。

生まれ育った故郷は人間の心の原点である。南部の精神風土から生まれた『ジョージア・ボーイ』の14の短編の、滑稽でかつ物悲しいエピソードのなかに現れる素朴なユーモアには、マーク・トウェイン文学以来のトール・テイルの伝統が顕著に見出せる。これは、コールドウェルの主要な作品群のなかでももっともユニークな作品と位置づけられようし、とりわけコールドウェル自身が愛着を示した傑作でもある。「喜劇の源泉をたどれば暗愁に辿りつく」とはマーク・トウェインの言葉であるが、コールドウェルの文学はマーク・トウェインの精神的系譜を継承するものといえるであろう。

I 『ジョージア・ボーイ』の誕生と文化的背景

アースキン・コールドウェルが1943年に発表した『ジョージア・ボーイ』は、アンダソンの『ワインズバーグ・オハイオ』(*Winesburg, Ohio*, 1919)やサロイアンの『人間喜劇』(*The Human Comedy*, 1943)

と類似の形式をとった連作長編である。14の短編のうちの1編は、1937年の「ニューヨーカー」誌⁽³⁾に掲載され、次いで2編が1940年に、続いて1編が1941年に、さらに2編が1942年にそれぞれの雑誌に発表されているので、未発表の書き下ろし短編は8編ということになる。つまり1937年から1942年の5年間をかけて、デーリエン、ニューヨーク、ロサンゼルス、ロンドン、モスクワ、中国、サンタフェ、ツーソンなどで断続的に書き継がれた。

ヴィッキー・ゴールドバーグ著『マーガレット・バークホワイト』(1986)によれば、1941年10月、コールドウェルと報道写真家でもある妻のマーガレットはモスクワに滞在していた。ソビエト作家同盟はコールドウェルを大歓迎した。資本主義社会における階級と人種迫害の問題を作品のなかで描写したことで、彼はロシアでは文学的英雄となっていた。現代のもっとも苛酷な戦闘のひとつに直面しつつあるモスクワで、マーガレットはただひとりの外国人写真家であった。窓の外では、あらゆる方面から、新しい領域が大声で探訪を呼びかけており、記者気質をもつ彼女はすぐさま通りに飛び出して行った。しかし彼は、ホテルで腰をおろし、ジョージアの貧窮白人と黒人の物語をタイプライターから打ちだしていた。驚いたマーガレットは、「私にはまるで、彼が新しい経験に対して自分の周りにバリゲートを築き、安住してられる以前の活動領域にひきこもり、タバコ・ロードへと逃げ帰ろうとしているように思えた」⁽⁴⁾と書きとめている。小説家とフォトジャーナリストのこの基本姿勢の相違は、私生活においては「静」と「動」の閑^{せむ}ぎあう修羅場でもあっただろうと想像される。ともあれ伝記作家ゴールドバーグは、「モスクワで書きはじめた短編は1943年に『ジョージア・ボーイ』という本のなかで発表された。このなかの幾編かは名作である」⁽⁵⁾と記しているが、それらがどの短編かはゴールドバーグも特定できていない。

『ジョージア・ボーイ』は1942年12月17日、コールドウェルの39歳の誕生日に完成した。出版をまえにニューヨークで記者に語った次の言葉は、この作品によせる作家の夢と抱負と執着とを簡潔に語っているといえよう。

「私はこの作品の執筆に4年の歳月を要しました。今までの私のどの作品よりも長い時間をかけました。この作品は、いくぶん私がそういうふうに暮らしたいと望んだ、そしていくぶん私の少年時代の生活を具現した一人の少年についての物語であります。」⁽⁶⁾

このユーモラスでチャミングな作品は、今世紀初頭の南部の牧歌的

田舎を舞台に、時間がゆったりと流れ、あまり束縛を受けない人々の生活を映しだしている。生まれ故郷へのノスタルジアを織りまぜたと思えるエピソードは、作家自身の少年時代を彷彿させるものである。

では、この作品の文化的背景はどのようなものであったのであろう。南部地方というのは、アメリカでもっとも強い絆によって結びあわされている南部11州をさし、そのなかのジョージア、アラバマ、ミシシッピ、ルイジアナの4州を深南部諸州（the Deep South）と呼んでいる。この地方は温暖な気候と豊富な雨量に恵まれ、綿花の大生産地である。奴隷制大農園制度以来、南部の白人は保守的で貴族的であり、白人優位感が根強く、南北戦争以後も州法などの制定で黒人差別待遇が強行されていた。人種的にはアングロサクソン系白人プロテスタント（WASP）が圧倒的な勢力を占めるようになった。人種的な絆と経済的な要素とが重なりあって南部の繁栄が築かれてきたのだが、南北戦争では完敗を喫したうえ、奴隷開放を強いられることによって、綿花の栽培は危機に瀕することになった。

アメリカの南部における大農園制度は、南北戦争によって奴隷解放が行われた後も旧態依然として存在し、ブア・ホワイトとよばれる特殊な階層を生んだ。この貧農白人は、物納小作（cotton-tenant）、分益小作（sharecrop）、金納小作（cash-tenant）その他、いろいろの形態をとる小作農として地主の直接の搾取を受けるか、あるいは小自作農として大農場に圧迫され、金融商業資本に吸収されてしまう特異な白人の階層のことである。彼らは、大地主や農業資本家の収奪ばかりではなく、第一次世界大戦後、南部特有の低賃金や長時間労働に従事する意識水準の低い、労働力を求めて北部から大挙して移住してきた紡績産業やタバコ産業その他の巨大な産業資本の圧迫を受けた。一方、労働市場では重労働によくとえる黒人労働者との競争が激化して、ブア・ホワイトの労働条件や生活水準はいっそう劣悪な状況に追い込まれていった。このようにして彼らは、アメリカ資本主義が築いた近代社会の片隅でうごめく、異質的で特殊な貧窮階層として形成され、文明社会の一隅に追い込まれて、南部コミュニティのコムプレックスを彩る負の要素となった。

コールドウェルは好んでこの階層の人々をとりあげ、彼らの生態と運命をきわめてリアルな筆致で描きだした。この作家は、生涯をとおして、強烈な社会的関心の埒外に身をおくことはなかった。彼の社会学的リポート『小作農』（*Tenant Farmer*, 1935）のなかでも如実に語られているように、彼の作品は、まさに「神に見捨てられ、人に見捨てられた」⁷⁾

(God-forsaken—Man-forsaken) 荒廃した大地にしがみくように暮らす貧農白人の赤裸な姿をえぐりだした、衝撃的なドキュメンタリー文学でもあった。

たとえばジェイコブズの論攷「タバコ・ロードのユーモア」(“The Humor of ‘Tobacco Road’”)⁽⁴⁾という詳細な研究によってもその実情を窺うことができるが、慢性的な飢えと栄養失調のために無表情で醜悪で懶惰な生活状況と、それが生み出す人間感情の喪失、無気力、無知、絶望、刻薄、貪欲、狡猾、淫蕩、残忍と暴虐などの悪魔的な側面が彼らの貧窮をなおいっそう陰惨なものにしていく実態を、この作品は赤裸々に描いてみせたのであった。南部辺境地帯にあっては、家族関係の意識すら失われ、道德の虚飾を剥ぎとられたこうした人々には、野性的な性本能が強い衝動力として現れるのである。

南部の黒人の人口は圧倒的な比重を占め、経済的にはもちろんのこと、性的にさえもライバルとなり、時として彼らの優位にさえ立ちかねない黒人に対するプア・ホワイトたちの焦燥や憎悪の姿に、とりわけ、作家の眼は向けられた。彼らの軽蔑、嫉妬、恐怖の念はさらに黒人リンチなどの深刻な形をとって現れるのを、彼は見た。『七月の騒動』(*Trouble in July*, 1940) は黒人問題を正面からとり扱った傑作である。黒人少年ソニーのリンチの最終章のダイナミックな幕切れは、この作家の全作品の中でももっとも傑出した場面のひとつであるといえる。筆の走りを抑制したハードボイルドの文体は、音楽的効果までもたらした名文である。

II 『ジョージア・ボーイ』の構成と解説

いま、手許にある本は、デュアル、スローン & ピアス社 (Duell, Sloan and Pearce: New York) 発刊の初版本である。注目すべきは、この本が戦時版 (WAR EDITION) とプリントされた下に、“This book is produced in accordance with conservation orders of the war production board.”と書かれてある。戦時下の出版事情を反映したためか、ダストジャケットも茶色を基調とした地味なものであり、裏面の作家のうつむきかげんのポートレートは、憔悴して年より老けてみえる。献辞には「ジューンへ、愛をこめて」(“FOR JUNE with love”)と書かれてある。コールドウェルは、私生活では二番目の妻のマーガレット・パークホワイト (Margaret Bourke-White) と離婚し、彼の39歳の誕生日の4日後の1942年12月21日に、21歳の若く美しいジューン・ジョンソン (June Johnson) と結婚したばかりであった。献辞にイタリッ

ク字体で「愛をこめて」と強調して記したところには、作家の新妻による愛情の深さが窺えて微笑ましい。

すでに説明したように、『ジョージア・ボーイ』の構成は14の短編から成り、連作形式をとっている。ジョージア州メリーウェザー郡シカモア (Sycamore, Merryweather) という牧歌的な農村がこの話の架空の舞台である。ジョージア州にはシカモアという町が実在し、メリウェザー (Meriwether) 郡というものもあるが、作家がそれらからヒントをえたかどうかは不詳である。シカモアについて詳述はなされていないが、おそらく大西洋沿岸鉄道沿いの町であろうと推測される。その理由は、ストループ父ちゃん (Pa Stroup) の卑劣な弟がこの町にやってきた時、彼は首のまわりに、沿岸線の貨物列車の制動手が首から煤が入らないように巻きつけるのと同じ赤と黄色のバンダナを結んでいたからである。このようにして注意深く読み進めていくうちに、初めて、町の具体的状況が把握できるのである。町の周辺をブライヤー・クリークが流れ、ユニバーサリストの教会、郵便局、製氷会社、製粉所、魚市場や食料品店などがあり、また町の野球チームまであることが分かってくる。

ストループ一家の経済状態や社会的地位を示す家屋についても、各章の断片的な描写をつなぎあわせると、彼らの住宅の全体像が理解できるのである。夏の通風をよくするための、地面から3~4フィートも離れた高床式2階建ての母屋には、玄関と台所の屋根が接続し、さらに物置小屋と鶏小屋が付設されている。正門は表通りに面し、裏門は裏小路に接し、周囲には高い板塀がめぐらしてある。家畜・家禽としては、気の荒い何匹かの番犬が家の横にチェーンで繋がれおり、馬車を牽かせるためのアイダ (Ida) という名のラバが1頭、さらに闘鶏用の軍鶏や畑から連れてきた5頭の山羊が登場したりする。1辺が150フィートもある庭にはモリスが丹精こめて育てた1本のスズカケの木があるが、数年前に枯れ木となってしまう、いまでは40~50羽のキツツキの生息場所となっている。

主要な登場人物は、農夫のモリス・ストループ (Morris Stroup) を主人公として、妻マーサ (Martha)、ヤードボーイの黒人少年ハンサム・ブラウン (Handsome Brown) が脇役として配され、一人息子のウィリアム (William) が語り手として話が展開する。

モリスは典型的プア・ホワイトというよりは下層中産階級 (lower middle class) に属する人物といえる。なぜなら彼は、2階建ての家屋に住み、家畜を飼い、田舎には丘ひとつぐらいの、かなり大きな畑を所

有していて、ハンサムをこき使ってトウモロコシや南京豆といった作物を栽培しているからである。農業は副業にしているのが実態であろうけれど、裕福では無いにしても、日々の食に追われる様子はみえない。彼は、怠惰な性格で、朝食が終わると玄関の踏み段を枕に惰眠を貪り、農耕はいくらかするが規則正しく勤勉に働くことを嫌っている。奇想天外な金儲けを企み、女には眼がない。大部分の時間は釣りやゴシップ話や闘鶏、午睡などに費やしてしまうヴァガボンド（遊民）である。自分の無知に起因する失敗はすべて、この下働きの少年ハンサムに責任転嫁してしまう。彼の突飛な行動、奇抜な発想、奇妙な詭弁はもっぱら嘲笑の対象になってしまう。しかし、深南部のプア・ホワイトと同様に、彼の黒人虐待の想念は、超過激ではないが、骨の髄までしみ込んでいる。ここにも人種差別に根ざす、深刻な南部気質が窺えるのである。

妻のマーサは、毎日洗濯盆の上にかがみ屈み込んで、骨身にこたえる仕事に精出している。彼女は、洗濯仕事を生業として、細腕で一家の暮らしを支えている働き者である。非生産的な、虚脱したぐうたら亭主を絶えず叱咤し、女房の前ではぜんぜん頭があがらない亭主を尻目に、事実上は族長的な家長の威権をふるっている。裏庭に洗濯釜を置き、その下で松の根を燃やし、重労働にたえている。めっぽう口は悪いが、涙もろい性格である。敬虔なクリスチャンで、生活改善婦人会会員でもある。数年前、孤児であったハンサムを引き取ってからは、自分の一人息子ウィリアムと同様に可愛がっている。

11歳のときストループ家に引きとられて以来（3～4年の歳月が経過していると推測される）、黒人少年ハンサムは、主にモリスの命令で、外仕事の下働きをさせられているが、時にはマーサの指示で皿洗いなど、家の中の仕事も任される。優遇されず、いつも損な役目押しつけられるハンサムは、喜劇的に描写されてはいるものの、黒人虐待の矢面に立たされている。南部農民の黒人に対する特異な慣習を顕著に垣間みることができる。

ウィリアムはストループ家の一人息子で、12歳位である。（晩年のコールドウェルはインタビューでウィリアムを10歳から12歳位と語ったことがある。）彼は物語の語り手として登場し、あくまで脇役的存在である。しっかり者で世間体を気にし、良識もある母親を評価しながらも、怠け者の父親が好きでたまらない。父親と母親の微妙な力関係、両親と自分との間のバランス、遊び友達ハンサムにたいする両親の処遇等々を傍観者としてしっかりと公平に観察している。語り手の少年としての立場

上、作品中に余り自己を表面にださないのは当然のこととして、作品群の底に一貫して窺える姿勢は、父親に親近感を抱いている点にある。一家の実権を握る母親に対して、弱者の立場にある恐妻家（henpecked husband）の父親に対する判官贔屓がはたらいているためでもあろうか。この作品は、ヘミングウェイの『ニック・アダムズ物語』（*The Nick Adams Stories*, 1972）の中のニックの場合のように、〈イニシエーション〉の物語として読むことも可能である。

次に14編の個々の挿話についての梗概を述べ、さらに寸評を加えてみたい。

（I）「父ちゃんの梱包機」（“My Old Man’s Baling Machine”）

現実ばなれした経済観念の持ち主であるモリスは、町にやって来たイカサマ商人の術中に陥って、頭金50セントで得体のしれぬ製梱機なるものを買わされる。これに不要の古新聞、古雑誌などを入れれば、たちどころに梱包されて、次々と屑紙の束ができる。その後1年間毎週50セント（分割払い残高）を徴収しに来るその男が、屑紙を買い取っていくという仕組みである。モリスはハンサムに手伝わせて目につく紙という紙を梱包し、そのはては部屋の壁紙まで剥がす始末。そこへマーサがあらわれ、大切にしまっておいた料理の本や洋服の型紙、教会からの預かり品の賛美歌集まで括られているのを知っていきりたち、梱包を全部解かせてしまう。さらに、昔の恋人や求婚者たちからもらったラブレターまで屑束の中に混入されているのを知ったマーサは烈しく泣きだすが、これに対するモリスの会話は飄々としていて捉えどころがなく、この第I挿話の読みどころとなっている。

「手紙ならまた新しいやつをいくつか書いてやるさ、マーサ」と父ちゃんはいった。母ちゃんは立ち上がった。

「昔の恋人たちが私にくれた手紙だけァ、もっと大切に扱って欲しいもんだね」と彼女はいった。「お前さんのくれたものなんぞァどうだってよいけんどね」⁽⁹⁾

こうして父ちゃんの一攫千金の夢も破れ、昔を忘れられない母ちゃんの感傷を嘆いて幕となる。モリスの金儲けを企んだ奇抜な話がユーモラスに描写されている。

(Ⅱ) 「ホーショウ牧師のために鐘を鳴らした日」 (“The Day We Rang the Bell for Preacher Hawshaw”)

モリスはホーショウ師に頼まれて、結婚式の当日、お祝いの鐘を鳴らすために教会へ行く。「ユニヴァーサリスト教会の日曜礼拝にできるようにと勧誘にもう来ない」という条件をとりつけたうえでの行動である。無知なモリスは、ディーン・ドーンと葬送用の弔鐘を鳴らしてしまう。慌てた牧師の取りなしも間に合わず、しまいには花嫁・花婿両家の喧嘩にまで発展する。頑に鐘撞きを続けるモリスをようやく押しとどめた牧師は、彼を去らせるのだが、さすがに弱気の虫を起こしたモリスが「ひょっとして、何か宗教が欲しくなったらどうしたらいいかね？」と訊ねると、牧師からはけんもほろろの返答がかえってくる。

「お前さんはメソジスト教会かバプティスト教会の仲間に入れてもらったらいよ」と彼はいった。「ユニヴァーサリスト教会は、お前さん抜きでも結構やっていけるからね、ストループさん」⁽¹⁰⁾

作者の父は、ジョージア州の片田舎で長老派教会の国内宣伝部の役員をしていて、地域住民の間のさまざまな問題を解決するトラブルシューターの立場にあった。少年期の作家も、このエピソードに似たような話を聞いたことがあったかもしれない。この章は、南部の教会と農民との触れ合い、さらには教会宗派間の勧誘や反目などを側面から描いて興味深いものがある。この第Ⅱ挿話は、ストループ親子二人の大まじめな「間違い喜劇」(Comedy of Errors)とも呼べるものであろう。

(Ⅲ) 「ハンサム・ブラウンといまいましい山羊ども」 (“Handsome Brown and the Aggravating Goats”)

婦人会の仲間を招いた日の午後、田舎の農場からハンサムが連れて来た5匹の山羊が、屋根の上に一列に並んでいるのをマーサが発見。手を尽くしてみたが下ろすことができない。モリスは怖じ気づくハンサムをせき立てて屋根に登らせたところ、今度は山羊のほうに彼に向かい、攻撃に転じてきた。びっくり仰天したハンサムは足を滑らせ、裏庭の井戸に転落する。モリスは釣瓶の綱を下して彼を救出しようとする。マーサは、ショックから気絶して地面に倒れるが、やがて立ちなおると、彼が死んだものと嘆いて悲しむ。そのうち、15～20名の女客たちが到着し、この珍景にうち興ずる。マーサは恥じて家に駆け込み、鍵をおろしてし

まったので、女たちは声高に笑いながら帰って行く、という筋立てである。白くて長い顎髭を生やした、大きな牡山羊とハンサムとの、屋根の上の睨み合いや、山羊たちにむきになって腹を立て拳をふりあげるマーサ、モリスから無理難題を押しつけられたハンサムの怯えた言動がユーモラスに描写されている。

14編中2番目に書かれたこの民話風の人と動物の物語は、特に作家が愛着をおぼえたとみえて、作家自身が朗読したテープ（American Audio Prose Library に収録）が残されている。あらためてこれを聴いてみると、民間伝承の中から掘り起こしてきたようなこういった短編は、語り部の音声を通して聞くのが一番よい、との確信がもてる。（この作品の初出は、「いまいましい山羊ども」（“The Aggravating Goats”）として、「ニューリパブリック」誌（*New Republic*, Vol.103 (Aug.19), pp. 241-43）に1942年に発表された。）

（Ⅳ）「父ちゃんと別居妻」（“My Old Man and the Grass Widow”）

ある朝、いつもより早起きしたモリスは、アイダに馬車を牽かせて家を出てしまい、妻のマーサは例によって洗濯物の内職を始める。息子のウィリアムは、ベランダに腰をかけて父ちゃんの帰りを待つ。そこへ近隣に住む婦人がやってきて、一人住まいのウェザビー（Weatherbee）夫人の所にいるモリスを見かけたと告げる。マーサは、息子に留守を命じ、敢然と浮気の現場のモリスを捕まえようと出かける。ウィリアムは母親が急ぎ足に遠ざかるのを確かめると、自分は大急ぎで近道を通ってウェザビー夫人の家の裏手に出る。モリスは勝手口のベランダで、たった2カ月で夫に捨てられた若い女の素足を鶏の羽でくすぐっては笑わせている。仰向けに寝た彼女が身をよじったり、足を蹴あげたりして悲鳴をあげ、大声で笑うたびごとに、父ちゃんがカンガルミみたいに空中に飛び上がってみせるので、全体の様子をいっそう滑稽に見せるのであった。そこでモリスとウェザビー夫人を相手にマーサの大立回りが演じられ、彼は弁解も空しく家に連れ戻される。先に帰ったウィリアムが、マーサの連れ帰った父ちゃんとラバの哀れな様子に、思わず涙び笑いをもらすと、母親の機嫌はすこぶる悪い。

「そんな顔をするのはよしな、ウィリアム」と彼女は不機嫌にいった。「ときどき私ァ、お前も父ちゃんそっくりのわるだと思ふことがあるよ」父ちゃんは素早くあたりを見まわして、ぼくに眼を

向けた。そして右の眼でウインクしてみせると、子犬のようにおとなしく母ちゃんに従って、アイダの厩に向かって裏庭を横切っていった⁽¹¹⁾。

モリスは、息子が内心では男同士、自分の味方であるという暗黙の了解をしている。一方、母親のマーサは、自分の翼下にあると信じている息子に時折どことなく父親と結託した、回し者の怪しさを嗅ぎとって、穏やかではない。この挿話の結びでモリスが、妻に完敗を喫しながらも、鶏が地面に落とした羽を一本拾ってポケットに忍ばすくだりは、ユーモラスな不倫愛の、ささやかなレジスタンスをみせて笑いを誘うのである。(この作品の初出は同上のタイトルで、「コロネット」誌 (Coronet, Vol.9 (Feb.), pp.91-96) に1941年に発表された。)

(V) 「母ちゃんがベッシー叔母さんの所にいって留守の日」 (“The Time Ma Spent the Day at Aunt Bessie’s”)

マーサは、年に一度か二度、ベッシー叔母さんを訪ねる日を楽しみにしている。父と子は、「鬼の居ぬ間に洗濯」とばかり、気楽に振舞える日として大いに喜ぶ。この日も釣りに出かけようと息子にラバの用意をさせ、モリスは、鳥家から卵を2個拾って、表通りの店までタバコと交換に行く。ハンサムには餌のミミズを掘らせてから、準備万端、馬車で待っていると、父ちゃんが押っ取り刀で帰って来る。屑鉄を買いとる男が来たから、そこらじゅうの鉄屑を集めろという。ウィリアムとハンサムは、失望を抑えて、古鉄の収集に協力する。モリスはそれを売った金でゴム長靴を買った。そして、三人でいざ釣りにでかけようというとき、隣家のフラー (Fuller) 未亡人が駆けつけて来る。モリスが彼女の庭からポンプの把手、火のし、それに火掻き棒等々せつせと拾い集めていたのを、下宿人が見ていたというのだ。モリスの言い逃れもならず、ついにハンサムは、屑鉄泥棒の濡れ衣を着せられ、長靴を店に返して、その金で屑鉄を買い戻し、盗品を探し出してフラー夫人に返却する、という哀れな役を強いられる。こうしてモリスは息子とハンサムを釣りに連れて行く約束すらはたさない。ハンサムは、理不尽な主人にする抗弁も空しく腹を立てながらも、モリスの言うがままになるのである。黒人問題は、コールドウェルのあつかう主要なテーマのひとつであるが、この作品のハンサムも貧乏籤を引く点では変わりはない。

(VI) 「ハンサムと尻尾の尖った啄木鳥」(“Handsome Brown and the Shirt-tail Woodpeckers”)

庭のスズカケの枯れ木にキツツキが巣くって、雛を孵す頃になると木の幹を啄く音で未明から騒がしく、安眠妨害となっている。しかも早朝が一番いけない。20～30羽のキツツキが3時半頃から出てきて啄き始めるのだ。マーサは、この木を切り倒すのが一番の解決策というのだが、父ちゃんは「この木を切っちゃうくらいなら、これから先ずっと国の選挙で共和党が勝つほうがましだ」というのだ。父ちゃんは、熱烈な民主党員なのである。モリスはこの騒音封じのために、後退りするハンサムを木に登らせるが、やがて物音ひとつしなくなった。太陽が昇って、モリスが様子を見に外にでて、ハンサムを降りさせてみると、彼のジャンパーもオーバーオールもボロボロに啄かれ、頭髮はまだらに抜かれて目もあてられぬ。疲れ果ててヨロヨロとして、地面に立つこともおぼつかない。逆にハンサムは、木の上で眠ったりするから啄かれるのだぞ、とモリスから一喝されてしまう。(この作品の初出は、同上のタイトルで「スタッグ」誌 (Stag, (Feb.)) に1942年に発表された。)

(VII) 「父ちゃんとジプシーの女王」(“My Old Man and the Gypsy Queen”)

モリスが町で出会ったジプシーの幌馬車の一隊を連れて帰ってくる。父ちゃんの思惑は外れて、彼らは不要物の物々交換どころか、家にあるものを手当たりしだいに略奪し始める。マーサの着ている洋服から、子供の野球道具まで持って行こうとする。ハンサムの必死の働きで、彼の宝物のバンジョーやラバのアイダが盗まれるのをくい止める。やがてまっ赤な服をきて、いっぱい腕輪をはめたジプシーの女王が登場して、父ちゃんの手相は生命線が強い、運勢がこれから開けるなどと褒めてから、薪小屋に彼を誘いこんでなにやら怪しげな取引をする。女王が一隊とともに立去った後、下着姿のモリスにマーサは目を剝くが、女王の隙をみてせしめたという金時計を受け取って、ようやく怒りをおさめて家に入る。この挿話の最後は、「彼女が家の中へ入ってしまうと、ぼくは物置小屋にもどって来て、隙間から中をのぞき込んだ。父ちゃんは下着姿で薪の山に腰をかけ、黄色いリボンの固い結び目をほどこしていたが、それは紙幣の厚い束だった。」⁽¹²⁾

(Ⅷ) 「ハンサム・ブラウンの逃げた日」 (“The Time Handsome Brown Ran Away”)

ある日、ハンサムは断りもなく家出をする。マーサがモリスに聞いただと、ハンサムが大切にしているバンジョーを、昨晚無断で持ちだして、通りすがりの黒人に1ドルで売りさばいてしまったというのだ。動機も不純で、モリスは移動見世物 (carnival) が今朝小屋がけをすることを知っていて、ヌードショウの木戸銭が欲しかったからである。そしてモリスとウィリアムのハンサム探しが始まる。移動見世物の広場に来て、紆余曲折の後、ハンサムがボール投げの標的となって働いているのにでくわす。モリスはボールを買っていく度もハンサムの頭に命中させ、彼を失神までさせたあげく、ハンサムの決意を翻らせて家に連れて帰る。曲球のスピットボール (spit-ball) を見事に的に投げ込むモリスの腕前はなかなかのもので、彼は若かりし頃は野球のピッチャーをしていたらしい。

(Ⅸ) 「父ちゃんと可愛い仔牛」 (“My Old Man and Pretty Sooky”)

ある日、モリスが牧草を釣り竿の先につけて、他人の仔牛をおびき寄せながらひそかに連れ帰ってくる。探しに来た牛の持ち主も仔牛が見当たらないので帰って行くが、その後モリスが木陰で仔牛に草をやっているのを見つけて驚いたマーサは、暗くなったら人目を忍んでそれを返して来るようにモリスに厳命する。しかしマーサとモリスは、可愛い仔牛の鼻面や首を撫でたりしながら牧草を与えているうちに、正義一徹のマーサではあるが、父ちゃんの盗んできた仔牛を手放したくなくなる。「これをまた連れてって、ずっと牧場においとくのはほんとうにひどいようだね。夜になったり、雨がふる日にゃ、ずいぶん寒いこったろうからね」⁽¹³⁾などと彼女が嘆く図は珍しい。良心的で、情にもろい人間が、時に平常と異なった反応を見せる良い例であろう。

(Ⅹ) 「ハンサム・ブラウンの休日」 (“Handsome Brown’s Day Off”)

マーサが生活改善婦人会の寄り合いに出かけ、ハンサムも休日をとるはずの朝、モリスは、ネクタイ売りの若い行商女にうまく乗せられて、50セントを払うはめになる。現金を持たないモリスは、窮余の一策として、トム・オーウェンズ (Tom Owens) の畑でハンサムを働かせ、一日の労賃前払いとして50セントせしめて行商女に渡す。モリスの必死の

金策には、ネクタイの他にも期するところがあったわけだが、色仕掛けでせまった女もネクタイが売れば事たれりとさっさと引きあげてしまう。例によって、今日も休日がフィになったと嘆き悲しむハンサムだった。自分の欲望のためには、平気で下働きのハンサムの休日をとりあげてしまうモリスの無神経な黒人観は、同一線上をひた走って反省や軌道修正されることはない。「ハンサムと啄木鳥^{キツツキ}」の挿話と同様に、ここでも南部黒人の苛酷な労働条件の一端を垣間みる思いがする。

(この物語の初出は、「休日」(“Day Off”)として「コリアー」誌(*Colliers*, Vol.109, (May 30), pp.16-17, 45.)に1942年に発表された。)

(XI) 「父ちゃんの任官」(“My Old Man's Political Appointment”)

夕食後、ヴェランダで休んでいるところに、保安官のベン・シモンズ(Ben Simons)が訪ねて来て、モリスに野犬捕獲人にならぬかと誘う。先にベンは家族用の大型拡張式のお棺を作って金儲けをしよう、ともちかけたことがあった。今回もマーサは卑しめれたと腹を立てるが、モリスは一匹25セントの報酬と聞いてひきうける。翌朝、肉屋から10セントの肉片を、ウィリアムに買わせて、その餌であちこちの飼い犬をおびきよせて、3ドル分も留置場に入れてしまう。ベンが慌てて駆けつけてみると、町長の賞をとった自慢のセッターとか、その他著名人のスパニエルやアライグマ用の猟犬も混じっている。モリスの飼犬捕獲の事実がバレて、肉片で釣ったことをつきとめられ、仕事はフィになる。「ぼくたちが鐘をならした日」の挿話のなかでは、モリスは、昔学校の小使いをしていたことがわかるが、今度の浮浪性動物監視員の仕事で公務の体験は二度目ということになる。しかしモリスは、しょせん一日の時間を全部しばられるような仕事は苦手で、クビになった後は、自宅の庭のムクロジの木の幹に頭をもたせかけて、木陰での昼寝を楽しむのである。

(XII) 「父ちゃんの帰った夜」(“The Night My Old Man Came Home”)

クリスマスの頃のある雪の降る晩、久しく家をあけていたモリスが、酒に酔ったうえ、若い女を連れて帰って来る。独身だといわれてついて来た女は、事のしだいに怖じ気づいて、声もだせない。モリスは椅子を壊して暖炉に投げ込んだり、納戸に逃げ込んだり、派手な立回りのあと、今度は強さの点ではだれにもひけをとらないマーサとルーシー(Lucy)

が、くんづほぐれつ、表のヴェランダにでたとき、モリスはドアを閉めて、内側から鍵をかける。モリスは、感慨をこめて、息子に次のようにいう。

「ときどきおれァ、神様ァ世の中に、いつときに一人以上の女をつくらねえほうがよかったんじゃないかと思うんだよ」⁽¹⁴⁾

ウィリアムは蒲団にもぐり、今夜、父親と一緒にいる喜びをかみしめている。

(この作品の初出は、同上のタイトルで、「ニューヨーカー」誌 (*New Yorker*, Vol.13(Dec.11), pp.24-26) に1937年に発表された。)

(XIII) 「ネッド叔父さんの短い滞在」 (“Uncle Ned’s Short Stay”)

ウィリアムとハンサムは、水車小屋で碾いてもらったコーンミールの袋を担いでの帰り道に、シカモア駅から鉄道の線路沿いに走ってくる男に会う。モリスの弟のネッド (Ned) と名乗る男は、モリスの家を訪ねるところだという。途々、彼は家族の消息とか、畑の様子とかを訊ねる。しかし、マーサがネッドを見ると、たいへんな見幕で彼を追い払おうとする。札つきの前科者の義弟が、うらぶれて、一飯を乞いに立ち寄ったのであった。彼女は、能無し夫という十字架を背負いこんでいるのに夫の兄弟の面倒まで見切れない、と追い立てる。しかし、靴のやぶれから小指をのぞかせ、ヒクヒク動かしている義弟をじっと見つめていたマーサは、人が見ていないときを見はからって涙を払う。ネッドを裏口に來させて、ウィリアムを介して、マーサはソーセージとササゲ豆の煮物を一皿とコーヒーを与える。長いことコーヒーをすすりながら、ネッド叔父は甥に「死ぬまでいいストループ家の一員でいてくれ」と諭すように語る。ネッドは三日前に脱獄した脱獄囚であった。

(XIV) 「父ちゃんはその後変わった」 (“My Old Man Hasn’t Been the Same Since”)

闘鶏に凝っているモリスは、一週間ちかくも不在のこともある。彼は、カレッジボーイと名づけた、メリーウェザー郡のチャンピオンである百戦錬磨の軍鶏を大切にしていって、試合のある時は近村にまででかけて行く。列車に乗る金がないため歩いていくので、何日も家を空けるのであった。マーサは日がな近所の洗い物をし、夜は夜でアイロンかけをしてながしかの日銭を得ているのに、夫は闘鶏にうつつをぬかしている。彼女は、彼の根性を叩きなおす決め手を探していたが、ある日、怒りをぶ

ちまける。夕食に舌鼓をうったモリスではあったが、これがカレッジボーイのなれの果てであることを知らされると、絶句して、いずこともなく家を出る。「あのカレッジボーイをかい、母ちゃん？」とぼくはいった。「そりゃ、ひどいよー」⁽¹⁵⁾といい放ったウィリアムは、暗闇の中へ父ちゃんを探しに行く。マーサの英断は的を外したようだ。結びの数行は惻々として読者の胸をうつ。ジェイムズ・コージズは、このエピソードを連作全体の高峰と讃え、アメリカ近代文学のもっと優れた短編のひとつと激賞している⁽¹⁶⁾。

(この作品の初出は、同上のタイトルで、「フライデー」誌 (*Friday*) に1940年に発表された。)

終章

わが開高健は、コールドウェルの自伝『わが体験』(*Call It Experience*, 1951) を評して、「20年代、30年代にアメリカ文学は、めざましく多様な活力と感性を放射したが、コールドウェルは代表選手の一人であった。……はじけるような精力を淡々と語り、さりげないユーモアが漂っていて、思わず微笑させられる。広い肩と長い足で、彼はアメリカ大陸を放浪し、働くこと、見ること、書くことに生涯を惜しむことなく浪費した。名声を得てからも安住することはなかった。自由で無償な漂流を彼は渴望し、たえず人と生に対する感情を飢えさせておく工夫をこらした。深い単純さと卒直さで、彼はこの内面の苦闘を伝えている」と書いた。小説家であり、炯眼の批評家でもあった開高の「さりげないユーモアが漂っていて」という言葉に注目したい。コールドウェルという作家は、今世紀初頭の、南部辺境地帯の極限的状況下の、頹廃的でグロテスクなブア・ホワイトの実態を、きわめてリアルに描出してみせた作家である。人間としての感情の喪失、無知、暴力、性などがもっぱらであるだけで、そこは人間的な向上などどこにも見あたらない、閉塞的で出口のない死の世界であった。コールドウェルの執筆動機は、そうした悲惨な状況にたいするヒューマニスティックな同情からであったが、このような陰惨で奇異な実態を忠実に描きだす作家の筆は、本来的に悲劇的にはなりえず、逆に喜劇的になる稟質をもっていた。貧困を暴きだす彼のフィクションの世界がグロテスクで喜劇的にならざるをえなかったのは、彼の扱う現実があまりにも痛ましいものであったからである。

語り手のウィリアムは、『ジョージア・ボーイ』の14編の挿話の全編に、立場上からして登場する。最後の第XIV編の挿話では、たまらず父ちゃ

んの肩をもつが、その他の作品に自己を覗かせることはない。母ちゃんの尻にしかれ、怠惰で仕事嫌い、正直でもないが、見事に人を騙しおおせるほどの知力もないモリスは、第Ⅻ編以外のすべてに登場する。好色漢のモリスが性的ミスアドヴェンチャーをひきおこすのは、14編中の4編にすぎない(Ⅳ,Ⅴ,Ⅶ,Ⅻ)。この気儘男の背景には、女の細腕で一家の生計を支えている、働き者のマーサがいるが、第Ⅱ,Ⅴ,Ⅹ編の挿話には直接顔をださない。この作品のヤードボーイのハンサムは、きわめて魅力的な存在で、第Ⅱ,Ⅳ,Ⅺ,Ⅻ,ⅫⅣは姿をみせないが、第Ⅶ,Ⅷ,Ⅹでは主演として登場する。ときには主人の意に逆らうことを面と向かっていえる、コールドウェルの作品には珍しい、“人格化された黒人”である。このハンサムの基本的な自然さこそが、他の登場人物の奇矯な振舞の数々をも受け入れやすくし、この作家の他の作品とは違った手触りを与えている。

文体的には、作者はこの階層にふさわしいスタイルを駆使している。つまり短いセンテンス、方言の多用、無教養者の破格文法、簡単な単語、単純な構文、簡潔なフレーズの繰り返しなどを意識的に多用し、ユーモアの効果は一段と高まっている。

コールドウェルは、ヴァージニア夫人を帯同して、1960年2月、71年11月、82年4月と、三度来日した。日本ペンクラブ例会で、初来日の目的を問われると、「現在アメリカでは、アジア風邪が蔓延している、どうせ罹患するなら、本場のアジアでやられようと思ってやって来た」と巧みに話をそらしながら、機知に富んだ応答をして、参加者からしばしば笑い声がおこった。82年の春、成田空港に出迎えたわたしは、夫人に「あなたが楽しみしていた日本の桜は、残念ながらもう盛りを過ぎてしまいました」と声をかけると、コールドウェルは「でも富士山はだいじょうぶだろうね?」(“But is Mt. Fuji still there?”)と喋ってにっこり笑った。当意即妙な応答もさることながら、ジョージア・ボーイの面影をとどめる、老作家の嬉しそうで悪戯っぽい表情がまことに印象的であった。東京でコールドウェルと共にすごした一週間余の間、わたしはつとめてこの作家をひとりの世界に置くようにした。作家の最後の著作となった自叙伝、『一所懸命』(*With All My Might*, 1987)の構想を巡らせていることを、十分に理解していたからである。

〈その他の参考文献〉

1. Edwin T. Arnold, ed. *Erskine Caldwell Reconsidered*. UP of Mississippi, 1990. (Ronald W. Hoag, "Canonise Caldwell's *Georgia Boy*," pp.73-85 and F. Kitajima, "Caldwell in Japan," pp.42-48. 参照)
2. _____, *Conversations with Erskine Caldwell*. _____, 1988.
3. Sylvia J. Cook, *Erskine Caldwell and the Fiction of Poverty: the Flesh and the Spirit*. Louisiana State UP, 1991.
4. Harvey L. Klevar, *Erskine Caldwell: A Biography*. U of Tennessee P, 1993.
5. Dan B. Miller, *Erskine Caldwell: The Journey from Tobacco Road*. Alfred A. Knops, 1994.
6. Wayne Mixon, *The People's Writer: Erskine Caldwell and the South*. UP of Virginia, 1995.
7. Robvert L. McDonald, ed. *The Critical Response to Erskine Caldwell*. Greenwood Press, 1997.
8. Malcolm Cowley, *-And I Worked at the Writer's Trade*. Viking Press, 1963. (VIII, *GEORGIA BOY*. pp.113-32. 参照)
9. Scott MacDonald, *Critical Essays on Erskine Caldwell*. G.K.Hall, 1981. (W. M. Frohock, "Erskine Caldwell: Sentimental Gentleman from Georgia." pp.201-13. 参照)
10. 西川正身解説・注釈, *Georgia Boy* (研究社, 1966).